vol.2
2005.6

Create

高知大学大学教育創造センター

CONTENTS

寄稿「今、学生と大学に求められているもの」
／湊　孝司氏　2
平成16年度活動報告
企画・評価専門部会　4
教育創造専門部会　6
平成17年度活動計画
企画・評価専門部会　8
教育創造専門部会　10
海外調査報告　12
新任スタッフ挨拶　13
Action②　14

「仕掛け人市」会場内の様子

KOCHI UNIVERSITY

寄稿

今、学生と大学に求められているもの

～大学の存在意義を問う～

（有）学びリサーチアンドマーケティング
代表取締役　湊　孝司
（平成17年度　高知大学学長アドバイザー）

私は3年前、リクルートから早期定年退職制度を利用して独立し、各大学からの受託調査や学生募集に関するコンサルタント業を営んでいるが、このような仕事をしていると、大学以外の教育機関や企業などを訪問することが多くなる。

数年前、関東地区のある私立大学からの依頼で、県内および隣接県の幼稚園・保育園の園長に対して、保育士や幼稚園教諭の採用基準に関する調査を行った。その際、公立と私立、保育園と幼稚園を問わず、入園する園児数が減少すれば、即経営困難となるため、必死で努力をしている話を数多く聞いた。その中で、訪問したある保育園の職員室の壁に大きな張り紙がしてあった。そこには、

「この世に生き残る生き物は、
最も力の強いものか。そうではない。
最も頭のいいものか。そうではない。
それは、変化に対応できる生き物だ。　ダーウィン」

という言葉が書かれていた。実際にはダーウィンはそういう言葉をどこにも残していないらしいが、小泉首相が国会で引用する以前に、既にこの保育園の経営哲学として、園内に浸透させようとしている 40代園長の姿勢に感心したことを覚えている。

一方で、永いところでもたかだか100年ぐらいの歴史しかない多くの大学では、組織の年長者や声の大きな人が、自分たちの体験してきた大学運営が正しい大学像であると固執しその既得権を主張する姿がある。そこには、目の前で起こっている現実に対応せず、ましてや来るべき未来への準備もせず、たかが 100年ぐらいで作られた大学内の常識に凝り固まっている姿勢が見て取れる。いったいどこに「知」があるのか？　教員個人に「知」はあったとしても、大学全体としての「知」はどこに?と考えてしまう。

少子化による18歳人口の減少の影響で、各大学は経営に苦慮しているが、保育園や幼稚園は、出生率の低下や景気などの影響で入園者数が減少してきた。1992年の18歳人口のピーク時、大学は拡大路線で臨時定員増、学部増設などを繰り返し、新しい教育組織を作れば作るだけ人が集まるといった、お祭り騒ぎのような経営をしている時期に、既に保育園や幼稚園は冬の時代を迎えていたのである。そういう意味では、大学（高等教育機関）より15年も早く、この大波に耐え、生き残ってきた保育園や幼稚園の経営者の言葉は参考になるところが多く、今の大学が参考にすべき良い素材はそこに数多くあると感じた。

ところで、その調査の中身であるが、保育園も幼稚園も、採用したい人、ぜひ来て欲しいと思う人は、成績が良く、知識をたくさん持っている人ではなく、まずは気働きのする人、そして、子供と一緒に遊べる人、子供と同じ目線でモノが考えられる人、知恵を生み出したり、自分で工夫してみることができる人という結果だった。ということは、どんなに一生懸命高等教育機関で勉強して、保育士や幼稚園教諭を目指しても、高校生ぐらいまでに形成されるであろう人格的な部分で、既に採用されるかどうかは8割方決まっているということにもなる。そうであれば、AO入試による相互選抜において、この素質を見抜きさえすれば、あとは技術だけを身に付けさせても、他校よりもずっと評判のいい卒業生を送り出すことができるということになる。自由競争社会の中では、こういう勝ち方も選択肢の1つであると考えなければならない。

また、一般企業が求める人材も全く同じで、「ものの見方、考え方が柔軟で、創意工夫のできる人、……」というお馴染みの能力・スキルが並んでいくが、そういう観点から見れば、大学とは、卒業生が出て行く社会で通用する人になるための様々な“知”や“力”を身に付けさせていく場所であるともいえる。

数年前、首都圏の私立大学の学長が、学内の大改革時に、「今までは文学“を”教えてきた。この改革によって、ぜひ文学“で”学ばせたい」という挨拶をされた。単なる知識の伝授や教員たちの考え方を学生たちに覚えさせるような場ではなく、自分の知識や自分の考え方を素材に、学生たちに考える場を提供し、学生自身に残るもの、個々人の人格形成、人生哲学の形成などに関われることを重要視したいという考えにとても共感した。すなわち、“事象の合同”だけではなく、“事象の相似形”を読み取れる学生を育てることが、教育機関であっても研究機関であっても必要であり、専門分野に長けているのではなく、応用の利く人材が社会では賢い人と呼ばれるのである。「どういう人に、何を身に付けさせれば、どういうところで役立つ人になる可能性が高いのか?」を追究し、提供する内容（教育プログラム・授業など）を進化させ、より良い“教育”という商品を提供していくことが“教育機関の価値”であり、大学という“教育機関の存在意義”だと私は考えている。

また、身に付けさせる内容は資格系の学部にあっても教養系の学部にあっても、その中で行われる個々の授業にあってもそれぞれの役割があり、「必要な知識を覚えてもらうための授業」や「色々な視点を身に付けさせるための授業」があっても構わない。しかしながら、次世代の大学は知識ベースの積み上げ的な役割ではなく、「インターンシップ」や「自分の考えをわかりやすく伝える力を身に付けさせるためのイベント」など、別次元の能力開発的な役割がますます必要となってくるであろう。

さて最後に、私と高知大学とを結び付けている教育評価についてひとこと一般論を述べておきたい。先述したミッションステートメントともいうべき個々の教育組織の目標＝“存在意義”が明確にならない限り、本来であれば教育評価や授業評価はできないし、それを構成員が共有化しない限り、実際の改善アクションにも結びつかない。大学の目標（存在意義）と教育評価活動との関係性が希薄で、授業評価アンケートや学生・卒業生アンケート等が一部の委員会の教員たちの間でしか真剣に議論されていない状況では、教育の成果を生み出すことは極めて困難だと思われる。

今こそ大学は、トップのリーダーシップのもと、全学が一丸となって進むべき道＝“存在意義”を決断する時期に来ているのでないだろうか。決断とは「決めて、断つ」ことであり、選択と集中である。そして、“変化に対応できる生き物”になるためには、“存在意義”に即して柔軟かつ有機的に教育評価が機能し、不断に改善・改革が行なわれることが不可欠である。大学が、“変化に対応できる生き物”として“生き残れる物”になれるかどうかは、この数年の動きだけで決まってしまうであろう。その意味では、もはや議論をしている時期ではなく、決断し行動を起こす時期に入っているのではないだろうか?

企画・評価
専門部会

Report

平成16年度活動報告

部会長　立川　明

16年度の教育企画部門と開発・評価部門は、合同の企画・評価専門部会をおき、以下のような課題について取り組みました。

1 提言およびアンケート調査について

年度計画に従い、電子化シラバスについて記載内容を調査し、問題点を整理しました。成績評価の厳格化やフィードバックの必要性についてまとめ、提言としました。

共通教育で行っている「学生による授業評価アンケート」の分析を行いました。16年度は、年度計画に従い基軸英語について分析・集約し、報告書にまとめました。

過去2年間行われている「新入生意識調査アンケート」を16年度も実施しました。この3年分の結果をまとめて集約し、報告書にまとめて各学部と入試企画実施機構に報告しました。

2 各種アンケートの作成について

年度計画に従い、アンケートを作成しました。e-Learningシステム構築に伴い、その資源の実態調査のためのアンケートとして、全教員を対象とした「デジタル教材に関するアンケート」を作成しました。本年度実施予定です。

共通教育と学部教育との連結に関する問題点を探るため、学務委員長を対象とする「基礎教育に関するアンケート」を作成しました。これについても本年度実施予定です。

その他、教育評価を目的とした「卒業生アンケート」、授業改善のための「専門教育授業評価アンケート」について、アンケートの実施方法やアンケート項目を各学部に提案しました。

さらに、新入生の大学生活への導入を支援するための教育について、問題点を探る新たな取り組みとして、「大学生活導入教育アンケート」を企画しました。本年度Webアンケートシステムで実施予定です。

3 Webアンケートシステム試行について

16年度は、総合的な学習支援システムとしてのe-Learningシステム導入のため、まず手始めにアンケートシステムを導入しました。このシステムを使っていくつかの科目で実際にアンケートを実施し、試行を行いました。問題なく動作することが確認され、またいくつかの問題点も明らかとなり、17年度の本格使用に向けての課題となりました。

4 FD活動について

ＣＢＩのためのＦＤ

昨秋、本学が提出した「課題探求能力育成型インターンシップ（ＣＢＩ）の開発」が、文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代ＧＰ）に採択されましたので、これを全学に周知し大きく展開するために、2004年11月「ＣＢＩのためのＦＤ」が特別に開催されました。学長はじめ多数の学外ゲストにもご出席いただき、約180人という高知大学ＦＤ史上最多の参加者のもと、熱のこもったプレゼンテーションや質疑が繰り広げられました。

従来は、インターンシップというと就職準備活動として数週間程度「体験してみる」ものが主流でしたが、今回採択されたＣＢＩは、１～２年生のうちに長期間（半年程度）実施するもので、大学生活の意義考察・社会性獲得・表現力やコミュニケーション能力向上等を狙いとしています。ＦＤによってこうした共通認識が広まり、「ＣＢＩは実学偏重では」との疑問に対しても、「ＣＢＩは一つの教育手法で万能薬ではない」などの見解が示されるなど、高知大学の特色がよく表われたＦＤでした。

恒例の全学ＦＤ

ＣＢＩのためのＦＤ開催と同じ11月に「全学ＦＤ」が開かれ、小樽商科大学から船津秀樹教授をゲストスピーカーにお招きして、『留学生対象のインターンシップ授業の教訓』と題する講演をして頂きました。高知大学では未経験の取り組みであり、小樽商科大学の創造的教育活動に出席者は大いに興味を喚起されたようでした。加えて、船津さんは率直かつ正直に、失敗談や反省点についても詳しく述べて下さいましたので、ゲストスピーカーの講演にありがちな成功体験オンパレードとは、一味も二味も違った有益なお話でした。

次に、船津さんと3人の本学教員による「パネルディスカッション――インターンシップ授業の課題と展望」が行われ、聴衆とパネリストとの意見交換もあって、活気にあふれたＦＤでした。

新任教員ＦＤ

2004年度に本学に新規採用された教員を対象とするＦＤが、2005年2月に催されました。

高知新聞社会部副部長の石川浩之氏による『学力の環境』、松永副学長の『大学をめぐる状況と私たちの課題』というお話を聞いた後、新任教員は4チームに分かれて、グループ討論を行いました。テーマは『高知大学の教育改革と私たちの役割』とし、90分の甲論乙駁を経て、最後の全体会議で各チームごとに討論内容報告のプレゼンテーションも実施されました。

４つのグループ討論会場をすべて巡回し、議論にも参加した松永副学長は「新任教員の皆さんの、フレッシュで問題意識に溢れた討論に加えてもらって、大いに触発されました。厳しい指摘もありましたが、なぜか爽やかな感じに身も心も満たされました」と印象を述べていました。

16年度 活動日誌

	4月	5月	6月	7月	8月	9月
大学教育創造センター センター会議 運営委員会	2 センター会議① 12 センター会議② 19 センター会議③ 21 センター会議④	13 センター会議⑤ 19 センター会議⑥ 24 センター会議⑦ 31 センター会議⑧	7 センター会議⑨ 14 センター会議⑩ 18 運営委員会① 25 センター会議⑪	2 センター会議⑫ 9 センター会議⑬ 16 センター会議⑭ 23 センター会議⑮ 29 センター会議⑯	17 センター会議 臨時	1 センター会議⑰ 14 センター会議⑱ 29 センター会議⑲
企画・評価専門部会 専門部会…企画・評価専門部会 教育開発…大学教育開発委員会 教育評価…教育評価プロジェクト会議						3 教育開発① 24 専門部会①

	10月	11月	12月	1月	2月	3月
大学教育創造センター センター会議 運営委員会	8 センター会議⑳ 18 センター会議㉑ 26 センター会議㉒	2 センター会議㉓ 9 センター会議㉔ 10 FDフォーラム 2004 vol.1 16 センター会議㉕ 22 センター会議㉖ 24 FDフォーラム 2004 vol.2 30 センター会議㉗	2 センター会議㉘ 3 運営委員会② 7 センター会議㉙ 10 センター会議㉚ 21 センター会議㉛	6 センター会議㉜ 12 センター会議㉝ 20 センター会議㉞	2 新任教員研修FD 9 センター会議㉟ 9 信州大学から訪問調査 14 センター会議㊱ 14 運営委員会③ 28 センター会議㊲	9 静岡大学から訪問調査 23 センター会議㊳
企画・評価専門部会 専門部会…企画・評価専門部会 教育開発…大学教育開発委員会 教育評価…教育評価プロジェクト会議	4 教育開発② 28 専門部会②	5 教育評価①	20 教育評価に関する意見交換会 21 専門部会③	25 専門部会④	8 専門部会⑤ 24 専門部会⑥	1 専門部会⑦ 25 専門部会⑧

教育創造
専門部会

Report

平成16年度活動報告

部会長　　辻田　宏

平成16年4月、専任教員3名が大学教育創造センターに配置され、教育創造部門の実質的な活動が始まりました。教育創造部門の当面の活動は、まずは専門部会の設置と部会委員の選出等の体制づくりと2004年度の活動計画の策定でした。しかしながら、法人化直後の混乱した中で、年度当初は平成16年度の年度実施計画の対応に追われたため、遅々として具体的な活動ができないでいました。そしてやっとその体制づくりに着手しようとしていた矢先、思わぬ事態に直面することになりました。

「現代ＧＰ」への挑戦

教育創造部門のミッションとして当初から明確であったのが、「Ｓ・Ｏ・Ｓ」活動の支援でした。それは、センター及び同部門の設置に伴って旧高知大学の「Ｓ・Ｏ・Ｓ教育開発研究専門委員会」が廃止され、その業務が同部門に引き継がれたからでした。そこで、同部門の教育創造専門部会を、廃止された「Ｓ・Ｏ・Ｓ教育開発研究専門委員会」の委員を中心に構成しようと考えました。

そしてちょうどその頃、学長の意向を受けた教育推進本部の方から私を含めた同委員会の中心メンバーに、文部科学省が募集する「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代ＧＰ）」への対応が指示されました。それも、産学連携と大学連携（統合）の２つの新しい教育プログラムを企画・立案することになったのです。本来、教育創造部門は、新しい教育プログラムを開発することをもっとも特徴とすべきセクションですので、教育創造専門部会の活動内容に適ったものでした。それから、７月末の提出期限に向けて「現代ＧＰ」への挑戦が始まりました。

新しい課題探求型学習としての「自律創造学習」

２つの教育プログラムのうちの１つが、「自律創造型学習方法の開発と教育力の向上～教養教育におけるPBL的学習の全学導入～」でした。残念ながら、このプログラムは採択に至りませんでした。しかしながら、文部科学省に対して全学的に導入・展開すると宣言した以上、採択されなかったからといって止めるわけにはいきません。そして何よりも、学生にとっても本学の教育の改善と発展にとっても意義のあるプログラムだという自負と自信がありましたので、大学教育創造センター担当の共通教育・教養科目として２学期から「自律創造学習」授業を開設することとし、そのために「自律創造学習方法」開発プロジェクトチームを専門部会の中に設置しました。（※『Create』創刊号参照）

同プロジェクトチームでは、「自律創造学習」の授業計画や授業評価・分析等に取り組み、また、医学部で実施されているPBL授業のアンケート調査とその分析も行ないました。

2005年度は、プログラムの開発と実現のためにクラス数も増やしさらに研究を深めていく予定です。

CBIを１年生に知らせるための広報紙「Oooh!」vol.1、2
企画、取材、編集を１年生、６人の編集メンバーで行っている。

「ＣＢＩ」推進プロジェクトチームの設置と展開

周知のように、「現代ＧＰ」に「課題探求能力育成型インターンシップの開発～コラボレーション型インターンシップ（ＣＢＩ）授業システムの全学導入～」が採択されてから、学内の様相は一変しました。それは、このプログラムがいわゆる“競争的資金”を初めて本学にもたらしたからだけではなく、低学年次にしかも長期にわたって（最大６ヶ月）インターンに出かけるというその斬新な発想と仕組みが、本学の教育に大きな一石を投じることになったからです。

採択直後、早速に「ＣＢＩ」推進プロジェクトチームを設置しました。集中とはいえ２学期の10月から授業が始まることになったため、チームのメンバーは12月まで、授業の準備と実施の繰り返しに忙殺されました。授業時間以外の学生のチュートリアルにも奮闘していただきました。事前学習を終え、企業とのマッチングに成功した11名の学生が、年明けの２月から２か月間の実習（東京７名、関西１名、県内３名）に出かけました。４月からは、長期の実習が始まっています。

進化する「Ｓ・Ｏ・Ｓ」活動

パソコン必携の導入と情報教育における学生のピア・サポートを契機として発足した「Ｓ・Ｏ・Ｓ」活動は、今、転換期にあります。パソコンのトラブル・シューティングの役割は、実質的に大学生協が対応することになり、情報セクションの学生の関心は学生及び学内から地域（学外）へと移っていきました。国際交流セクションも新たにできました。

そういった状況の中で、学生のニーズの変化に対応した新しい「Ｓ・Ｏ・Ｓ」を構築していく必要性が生じてきました。その手始めとして平成16年度は、学生による「学生相互支援企画」を公募し（７件の応募）、そのプレゼンテーションと審査を実施するとともに、採用された企画（２件）については補助金を支給しました。

また、平成16年度も「プレゼンフェスタ」（２月20日）を大学教育創造センター主催で実施しました。「Ｓ・Ｏ・Ｓ」の再構築は、23組の学生が参加したこの「プレゼンフェスタ」との関係でも考えなければならないと参加者の一人として感じました。

16年度 活動日誌

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
教育創造専門部会 専門部会…教育創造専門部会会議 自律創造…「自律創造型学習方法」開発プロジェクト会議 ＣＢＩ…「ＣＢＩ」推進プロジェクト会議			「現代GP」の作成		11 専門部会① 23 専門部会②	7 自律創造① 15 自律創造② 24 自律創造③	12 自律創造④ 12 専門部会③ 29 自律創造⑤ 29 CBI①	16 CBI② 16 CBI授業システム協働開発委員会① 30 自律創造⑥			1 専門部会④ 18 専門部会⑤ 20 プレゼンフェスタ2005	26 CBI授業システム協働開発委員会②

PLAN
平成17年度活動計画

教育創造
専門部会

教育創造活動の成果を学生諸君に、そして全学へ

部会長　菅野 光公

高知大学における昨年度の教育創造活動の中で、特筆すべき第一は「課題探求能力育成型インターンシップの開発」が、文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に採択されたことです。2年間にわたって2000万円の予算が付くこのプログラムは、昨年秋から取り組みが開始され、授業・合宿・プレゼンテーション・インターン実習（東京や高知で）と、体系的に実践されています。参加した学生達の勉学モチベーションが向上したのはもちろん、さらに長期のインターンシップに挑戦する例も出ています。

今年度はプログラム2年目にあたりますので、質量ともに向上発展させていきながら、3年目以降の企画立案に向けた展開にも力を注いでいきます。

「自律創造学習」授業は、昨年度の2学期から履修者17人が、5グループに分かれてスタートしました。グループ毎にそれぞれの課題発見や、その解決に向けた活動に精力的に取り組みましたが、中には授業の中で論議したことが、課外活動として本当に実現した例も生まれました。「自律創造学習」授業のグループを核として「SINFA」という団体が産声をあげましたが、これは、今年から創設された四国アイランドリーグを応援するボランティア組織です。「SINFA」は同リーグに対する応援を、高知県で担う公式団体として認められており、ユニークな活動が現在、発展途上です。

高知大学と地元の高等学校が連携して、新たな教育プログラムを開発する「高大連携」が今年度から動き出しました。現役の高校教員2名が、4月から研修教員として、当センターに派遣されており、創造的な教育活動を展開すべく着手しました。

上記のような諸活動を担当する教育創造専門部会は、真っ白なカンバスに絵を描くような心構えのもと、昨年度よりも一回りも二回りも大きな作品を書き上げようと意気込んでいるところです。

教育創造専門部会

菅野　光公（大学教育創造センター専任教員・部会長）
辻田　　宏（大学教育創造センター専任教員）
池田　啓実（人文学部）
石筒　　覚（人文学部）
岩佐　和幸（人文学部）
上田　健作（人文学部）
中澤　純治（人文学部）
赤松　　直（教育学部）
内田　純一（教育学部）
小島　郷子（教育学部）
古川　　泰（農学部）

「自律創造型学習方法」開発プロジェクトチーム

辻田　　宏（大学教育創造センター専任教員・リーダー）
菅野　光公（大学教育創造センター専任教員）
立川　　明（大学教育創造センター専任教員）
堤　　敏広（大学教育創造センター専任教員）
石筒　　覚（人文学部）
村端　五郎（人文学部）
内田　純一（教育学部）
小島　郷子（教育学部）
佐藤　純一（医学部）

「CBI」推進プロジェクトチーム

池田　啓実（人文学部・リーダー）
菅野　光公（大学教育創造センター専任教員）
辻田　　宏（大学教育創造センター専任教員）
堤　　敏広（大学教育創造センター専任教員）
池田　和夫（人文学部）
石筒　　覚（人文学部）
岩佐　和幸（人文学部）
上田　健作（人文学部）
円谷　友英（人文学部）
小澤　万記（人文学部）
鈴木　啓之（人文学部）
中澤　純治（人文学部）
小島　郷子（教育学部）
福間　慶明（理学部）
松井　　透（理学部）
後藤　純一（農学部）

「高大連携教育」プログラム開発プロジェクトチーム

上田　健作（人文学部・リーダー）
辻田　　宏（大学教育創造センター専任教員）
堤　　敏広（大学教育創造センター専任教員）
岡谷　英明（教育学部）
藤原　茂樹（理学部）
永田　信治（農学部）
安藤　千速（教育研究生・丸の内高校教諭）

教育創造専門部会の前半期活動スケジュール

教育創造専門部会

4月　5月　6月　7月　8月　9月

- 教育創造専門部会
- 現代教育ＧＰ企画・作成
- 「自律創造学習」「CBI」「高大連携教育」プロジェクト
- Ｓ・Ｏ・Ｓ　活動支援

「自律創造型学習方法」開発プロジェクト

4月　5月　6月　7月　8月　9月

- 「自律創造学習」の実施（１学期・教養科目・２コマ）
- プロジェクトチーム再編
- 第1回プロジェクト会議
- 第1回プロジェクトチーム研修会
- 第2回プロジェクト会議
- 第3回プロジェクト会議
- 第4回プロジェクト会議

「ＣＢＩ（課題探究能力育成型インターンシップ）」推進プロジェクト

4月　5月　6月　7月　8月　9月

- プロジェクトチーム再編
- 実習生のモニタリング
- 第1回プロジェクト会議
- 実習生のモニタリング
- 第1回プロジェクトチーム研修会
- 実習生のモニタリング
- 東京ベンチャー留学支援
- 第2回プロジェクト会議
- 実習生のモニタリング
- プロジェクト調査
- 第3回プロジェクト会議

「高大連携教育」プログラム開発プロジェクト

4月　5月　6月　7月　8月　9月

- プロジェクトチーム設置
- 第1回プロジェクト会議
- 経験交流会
- 第2回プロジェクト会議
- 第3回プロジェクト会議
- 「高大連携教育」シンポジウム
- 第4回プロジェクト会議

アメリカ合衆国における実践的課題探求型学習に関する調査

～ Community Based LearningとService Learningを中心に ～

3月10日から19日までの日程で、アメリカ合衆国のカリフォルニア大学バークレー校、カリフォルニア大学ロサンゼルス校を訪問し、ロサンゼルス市郊外で行われた第16回全米Service Learning学会に参加してきました。調査メンバーは、辻田宏（大学教育創造センター長）、青木宏治（人文学部）、小島郷子（教育学部）、末本美千代（教務課主任）の4名でした。

今回の海外調査は、当初、PBL（Problem Based Learning）に関して行う予定でしたが、改めて事前検討した結果、予定を変更して、同じく課題探求型の学習であるCommunity Based Learning 及びService Learningを対象とすることにしました。その理由は、PBLはアメリカではメディカル・スクールや工学部等の特定の分野でしか行われていないので、大学教育創造センターの目指す全学的に展開できる教育プログラム開発の有効な情報を得られるかどうかに疑問を持ったこと、すでにアメリカのPBLの内容・実践については一定の情報を日本で得られる状況にあることなどでした。

バークレー校では，Service Learningセンター長のDr.Andrew Furco氏と同校高等教育機構「パートナーシップ」センターのGail Kaufman氏に応対していただきました。Furco氏によると，全部で約20ユニットのService Learningコースがあり、学生の人気があるコースは、社会福祉と都市計画であるとのことでした。また、Kaufman氏からは、Service Learningによる高大連携及び小・中学校支援について話を聞くことができました。

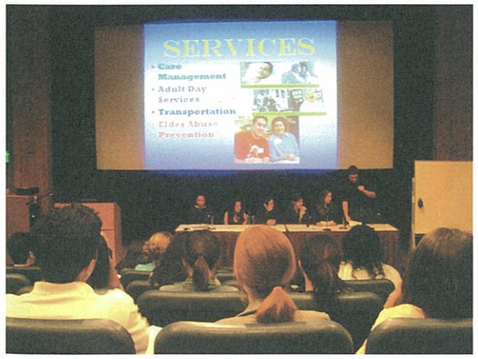
ロサンゼルス校においては、Community Based Learningセンター長のKathy O'Byrne氏と同校高等教育機構のCommunity Based Learningセンター担当であるLori J. Vogelgesang氏にヒアリングを行いました。同校におけるCommunity Based Learningのプログラムはインターンシップと Service Learningで構成されているということ、Service Learningは、ボランティアより地域研究的な要素が強いことがわかりました。翌日は、O'Byrne氏の薦めもあって、老人福祉をテーマとしたService Learningコースの学生の成果報告会（プレゼンテーション）を参観しました。

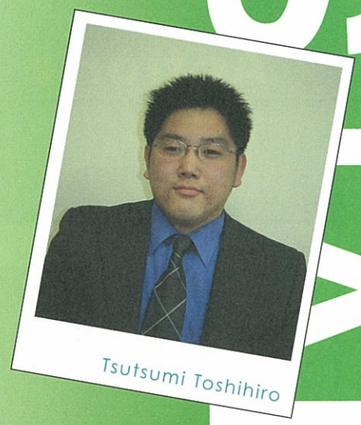
第16回全米Service Learning学会では複数のワークショップに参加し、各大学や学校等の報告を聞くとともに、参加者と交流しました。

（UCLA にて）

本調査では、両大学におけるService LearningやCommunity Based Learningの実施内容や方法、理念について理解することができたとともに、さらに実際の授業参観を通して、学生の実態を垣間見ることができました。本調査で得た知見・経験は、本学の大学教育創造センターにおける今後の教育活動の参考になるものでした。

（文責：辻田　宏）





学生・地域を育む大学づくりを目指して

大学教育創造センター　講師　堤（つつみ）　敏広（としひろ）

2005年4月1日付で着任しました堤敏広です。私は、慶應義塾大学卒業後、日本総合研究所、立命館大学、みずほ情報総研と移りながら調査研究活動を続けてきました。3月まで在籍していたみずほ情報総研株式会社では、主に地域産業・地域活性化政策の企画・立案・提言等を実施してきました。

センター専任教員として、特に学生の学習機会の拡大に寄与したいと考えています。高知大学の学生は、私が在籍していた慶應義塾大学や立命館大学の学生に比べて、その地理的特性などから社会の多様な人材に触れる機会に恵まれているとは決して言えません。そのような人材に触れることができる場（学習機会）の提供は、大学教員の責務であり、学生が自律的・創造的に学習することができる重要な機会となるのではないでしょうか。そのためにも、学生が自律的・創造的に学習できるための機会及びフィールドを提供していきたいと思います。

また、大学との連携を模索する自治体・組織に対して積極的に関与していきたいと思います。地域を創造する人材の育成やそのための教育機会に関するプログラムの開発・提供は、まさに大学教育創造センターが実施する業務であるからです。

高知大学の教育力及びそのプレゼンス向上に微力ながら全力を尽くす所存ですので、どうぞよろしくお願いします。

Action 2

SINFA

昨年度から開講されている教養科目「自立創造学習」の中で、受講生のひとりが「地域活性化のために四国アイランドリーグを支援する活動を行いたい」と提案。その後、学内の賛同者を得て SINFA（Sikoku Negative Followed Association）を立ち上げる。名称には、四国にあるネガティブな状況を打破したいという思いを込めた。 2月下旬には IBLJ 代表の石毛宏典氏を招き企画主旨を説明し、IBLJ 公式団体として承認を受けた。現在、活動が進行中。

▶SINFA 目的：四国アイランドリーグと地域を結びつけ、地域活性化に貢献する。

試合の合間のグラウンド整備の時間を利用して、クイズで盛り上げる。

2日に1度のミーティング。普段はほのぼのムードだが、試合前には緊張感もみなぎる。

進行状況

→ 球場運営

協力してくれるスタッフを県内の大学生や社会人を中心に集め、26名の運営サポーターと共にIBLJ主催ゲームの球場運営を行っている。

→ 球場内での企画運営

グラウンド整備の時間を利用して観客が楽しめる企画を計画している。

→ 広報宣伝活動

商店街への告知やポスターの掲示、ＨＰ・プロモーションビデオの制作中。

→ 球団と地域との連携

球団や地元商工会との共同でイベントを企画。アイランドリーグと連携して活動を行っている団体とも連携して、相互の情報共有を進めている。

今後の課題

→ 多くの人に足を運んでもらえるような、野球以外での“たのしい”を企画

現在、観客層は野球ファンや家族連れが主である。今後さらに多くの人が球場に来てもらえるような、楽しめる企画を計画している。さらに地域とリーグと連動した企画による地域活性化を目指している。

→ 球場運営サポーターの充実

今後の平日の試合日程においては、学生スタッフだけでは対応が不十分なことが予想される。このため一般の人を含めた球場運営サポーターの募集を行っている。

応援ヨロシク！ http://www.geocities.jp/bo31t087s/

ほっとコメント

「大勢の人が集まっての“たのしい”だらけの場所がほしい」（SINFA代表　社会経済学科３年生　納田　啓司）

四国には地域活性化を考える上でも、遊びを考える上でも“たのしい”といった場所が少ないと思っていました。四国アイランドリーグがそうした場所になることができたら最高です。

高知では、農家の方たちから米を提供してくれるというサポート活動も始まりました。こうした「アイランドリーグと連携した地域活性化」を実現していきたい。連携の輪を県内各地に広げ、県民の皆様に「おらがリーグ、おらがチーム」としての誇りを持ってもらえる活動に展開したいと思います。

編集後記

- ■センターの活動が少しずつ内外に見えるようになってきたでしょうか。（つ）
- ■当センターも２年目。起承転結で言えば「承」の年か。「承」の字よりも「昇」としたい。（是）
- ■原稿をまとめてわかったことは、本年も問題山積みということでした。（A）
- ■学生と地域が、誇れる高知大学をつくっていきたいです。（T）
- ■それぞれの課題に向かって頑張りたいと思います。（松）
- ■今年もフル回転の忙しさが予想されます。皆さん体調管理を万全に。（末）

■ 表紙の写真 ■

「CBI」授業・企画マッチングセミナーのプレゼンテーション風景。

150名を越える学生と社会人が参加。

平成17年６月発行
Published June 2005
発行者　高知大学大学教育創造センター
〒780 - 8520　高知市曙町2丁目5番１号　　電　話（088）844 - 8652